

輸入が再開されたばかりの米国産牛肉に特定危険部位の混入が発覚した。米国の検査官のミスとの報道もあるが、事の重要性を認識していない、完全に日本人の信頼を裏切った許しがたい所業である。我々を畜生以下に見ているのではないかと疑いたくなる。

それにしても、一向に雪は止まない。明日は完全に足止めである。

毎日通勤するバス経路であっても、意外に気付かないものである。旧川越街道、朝霞と新座を分ける、野火止台地への上り口（左側は「たびやの坂」と呼ばれる。）に当たる三角辻に道祖神か庚申塔のいずれかであろうと思われるものを見つけた。関東平野に粉雪降りしきる中、家内からは物好きねと笑われながら、写真撮影方々確認に向った次第である。



その写真がこれである。如何ほどの風雪に耐えてきたものか、六臂三眼の憤怒相をしていると言われる青面(しょうめん)金剛童子像と思しき像が彫られた庚申塔である。本来ならば、像の左側に刻まれる造立年月日は擦れてしまったのか陰も形もない。或いは別な所に刻まれているのだろうか。像版の両側面には、造立目的である「主安全」「泰平」の語彙が刻まれている。

足下には見猿、言わ猿、聞か猿を配しているようにも見える。本尊は多分に邪鬼をしつかりと踏みつけているものと想像される。一般的な鶏や、月、日は明確ではない。お参りをする方が居られるのだろうか。供花が捧げられていた。

庚申信仰は、元々中国の道教で説く「三尸（さんし）」説に基づく民間習俗であり、日本には、8世紀後半頃に伝わったのではないかとされ、10世紀頃になると宮中を中心に行われたが、民間に広まり始めたのは室町時代後期とされ、江戸時代になると仏教的庚申信仰が一般に普及した。江戸時代にはこの他にも神道式及び修験道式の庚申信仰が行われるようになった。

道教の教えによると、六十日ごとに巡ってくる庚申の夜は、色欲、愛欲、貪欲を慎み、善行をしなければならぬとされている。天には人間の罪科を司る神がいて、いつも監視している。だから長生きをし、幸福を得ようと願う者は、常に人としての道から外れないように行いを正していなくてはならない。人の体内にいる「さんしの虫」は、庚申の夜、人が寝ている間に天に昇って行って、その人の行いを神に報告する。神はその罪科に応じて人の命を縮め、又奪ったりもすると信じられた。人は誰しも悪事を働いたり、考えたりするものだから、庚申の夜は寝ないで「さんしの虫」が天に昇ることを防ぎ、願い事を祈らなくてはいけないとされた。でも一人で起きているのは退屈なので、講が組まれ念仏を唱えたり、お茶やお酒を飲んだりして集団で一夜をにぎやかに過ごすようになった。一晩だけでも、形式的であっても精進すれば後はどんなことをしてもいいし、幸福になり長寿も授けられると都合よく考えたのであろう。

庚申塔には、青面金剛の他に大日如来を配したもの、単に「庚申塔」と彫っただけのものなど色々なバリエーションがあるようだ。

因みに本日に最も近い「庚申（かのえ さる）」の日は1月31日である。

参考までに

「川越街道は、川越往還とも呼ばれ、江戸日本橋から川越まで約11里(43km)を結び、5街道とならぶ重要な街道であった。川越は江戸の北西を守る要であり、藩主には、老中格の譜代大名が配された。家康、家光も鷹狩りや参詣に度々この街道を往来した。宿場は、上板橋、下練馬、白子、膝折、大和田、大井の6宿が置かれた。大和田には忠犬ならぬ忠馬伝説に基づく「鬼鹿毛（おにかげ）の馬頭観音」やその隣に芭蕉句碑がある。

「花は 賤（しず）乃眼にもみえけり 鬼薊（あざみ）」(夜の錦 寛文6年、23歳の作。古来「賤の目には鬼は見えない」と言われてきた。しかし、賤たる自分でも鬼アザミの花はよく見える、というのである。諺を嘲笑ったうけねらいの作品。)

「たびやの坂」を登り、県道と交差する少し先には「横町の六地藏」がある。このほか宝暦6年(1756)と刻まれた庚申塔等がある。(折々の記 No40 赤い前掛けを参照)

(参考：百科事典、各種HP)